

入選 高学年の部

まかせておいて、おじいちゃん

福岡県

筑紫野市立天拝小学校 四年

渡邊 顕子

「あきちゃん、びつくりしないでね。」昨年の十二月の寒い日、学校から帰るとお母さんが悲しそうな顔で言った。

「おじいちゃんが入院したよ。」

「えっ。」

私はびつくりして心臓が飛び出しそうだった。おじいちゃんは、脳の病気で突然倒れたそうだ。おとといは、あんなに元気で、一緒にいつもの公園まで散歩したのに。

かけつけた病院のベッドにねていたおじいちゃんは、別の人みたいに小さかった。大好きなおじいちゃんが遠くに行ってしまうそうで、怖くて、ブルブルふるえてしまった。

今、おじいちゃんは退院して、大好きな散歩にも行けるくらい元気になった。でも、頭の中のほんの少しの部分が、故障したままなのだそう。そのせいで、数字の計算や、長い間物を覚えることができなくなってしまった。

「もう生きていても仕方ないなあ、なんて言う時もあるのよ。どうやって元気づけてあげたらいいのかしら。」おばあちゃんとお母さんが心配そうにため息をつきながら、顔を見合わせている。

「おじいちゃん、元気でいてね。おじいちゃんがいなくなったら、私、困っちゃうよ。」

今日も一緒に散歩しながら、私はさびしそうなおじい

ちゃんの背中に向かって、心の中でそっと呼びかけている。四人兄弟の三番目に生まれた私にとって、いつもやさしくにぎつてくれるおじいちゃんの手は、特別なのだ。お父さんやお母さんのヒザがお姉ちゃん達でいっぱい時も、おじいちゃんのあったかいヒザにフワッとすわったら、それだけで安心できる。このヒザで絵本をいっぱい読んでもらったな。お話に感動して、さい初に泣くのはいつもおじいちゃんだった。たくさんドライブにも連れていってくれた。おじいちゃんと海で見た、オレンジ色の夕やけは、今でも目の中にくかんでくる。一人ぼっちでさびしい時には、いつも私をそっとだきしめてくれたおじいちゃん。

「おじいちゃん、ありがとう。いつもそばにいてくれて。」

今度は、私がおじいちゃんの手をにぎってあげる番だ、これから漢字をいっぱい覚えて、たくさん本を読んであげるよ。新聞もスラスラ読めるようになりたいし、算数の計算だつていつ生けん命がらばるよ。

「あきちゃんにまかせておいて、おじいちゃん。これからもずっと一緒だよ。」